

## 書評

安富 歩・深尾葉子編

### 『「満洲」の成立

—森林の消尽と近代空間の形成—

江夏由樹

#### I 本書の概要

本書の目的は、「はじめに」によれば、「[近代——引用者]「満洲」社会の形成過程とその運動特性を、この地域の生態系との関係において明らかにすること」であり、その研究は、石田興平『満洲における植民地経済の史的展開』（ミネルヴァ書房、1964年）の学問的継承を目指すものであるとしている。各章はそれぞれに興味深い問題を論じているが、本書全体を通して、近代満洲の経済・社会の変容過程をトータルに捉えていこうとする姿勢に貫かれている。

「序章 バイコフに捧ぐ」（深尾）は、森林の伐採が進み、豊かな自然が失われていく近代満洲の姿を描いたバイコフの作品を紹介し、本書の試みは、そうしたプロセスがいかに進行していったのかを描くことにであると述べる。

「第I部 密林を切り裂く鉄道」は次の各章からなる。「第1章 タイガの喪失」（永井リサ）は、鉄道・都市建設が進むなかで、日本、ロシア、中国による満洲の森林調査とその伐採がどのように進んでいったのかを具体的に明らかにする。「第2章 鉄道・人・集落」（兼橋正人・安富）は、満洲における鉄道網の発展過程、移民の流入による人口増加、人口分布の空間的特性を明らかにし、鉄道に依存するかたちでそこに都市が成長し、同時に、「県城経済」が広く展開していったことを説明する。「第3章 凍土を駆ける馬車」（永井・安富）は、長白山系の森林と蒙古草原から、それぞれ、馬車材と馬の供給が拡大し、近代満洲に鉄道と連携した大規模な馬車輸送システムが展開したこと、そしてこのシステムがその後の満洲の経済発展、鉄道駅と県城を中心とする輸送網の成長に大きな役割を果たしたことを強調する。「第4章 タルバガンとペストの流行」（原山煌）は、満洲が鉄道により国際社会に組み込まれて

いく過程で生じたペスト大流行の歴史を、毛皮を求めて引き起こされたタルバガン濫獲の問題から論じる。

「第II部 すべての道は県城へ」は次の各章からなる。「第5章 県城経済」（安富）は、近代満洲社会の市場構造を分析し、そこにはスキナーが考察したような伝統的な定期市網は展開しておらず、荷馬車の普及、冬季の輸送コストの低下、大豆流通の季節性といった要因に支えられて、県城を中心とする流通網が展開していたこと、また、張作霖・張学良政権、「満洲国」の成立はそうした「県城経済」の存在に大きく依拠していた可能性を論じる。「第6章 県流通券」（安富）は、「県城経済」の実態を通貨の問題から、具体的には、満洲事変下の満洲各県で発行された県流通券の歴史から明らかにする。「第7章 廟に集まる神と人」（深尾・安富）は、満洲における廟会の開催がどのような時間・空間的分布をなしていたのか、また、当時の娘娘廟会の実際の姿を考察し、「県城経済」のもとで、満洲の廟会の市場機能は限られており、これは華北の場合とは大きく異なっていたことを論じている。

「第III部 新たな権力構造の創出」は次の各章からなる。「第8章 国際商品としての満洲大豆」（安富）は、満洲大豆が華中・華南、日本、ヨーロッパに移輸出された歴史と世界の大豆貿易の推移を概観し、大豆の国際商品化が近代満洲社会成立の契機となったことを論じる。「第9章 営口」（松重充浩）は、営口の西義順の経営破綻（1918年）の問題を考察し、過剰銀を基礎とする金融システムが衰退するなかで、張作霖政権による地域内通貨の統合が進んでいったことを明らかにする。同章の「附論」は、満洲近代史の研究史を手際よくまとめている。「第10章 奉天」（上田貴子）は、近代満洲社会における奉天経済界の動きを、商会指導者層の変遷を辿ることにより明らかにし、この時期、そこで中心的な役割を果たした指導者層は伝統的な商業経営者から近代的商工業経営者へと代わり、その過程で、張作霖政権の経済界支配が確実なものとなったと述べる。

「第IV部 比較の視点」は次の各章からなる。「第11章 山東の小農世界」（深尾）は、満洲とは対照的に伝統的な市場ネットワークが存続していた山東地

方社会の姿を描き、「第12章 スキナー定期市論の再検討」(安富)は、スキナーの農村市場モデルの説明と問題点の検討を行っている。「第13章 中国農村社会論の再検討」(深尾・安富)は、「共同体」と「市場」との関係から、中国農村社会の問題にいかに向かおうかという点を論じている。「終章 森林の消尽と近代空間の形成」(安富)は、本書全体の論点をあらためて整理している。

## II 本書の特長

以上にまとめたように、本書は二つの大きな研究課題から構成されている。一つは、満洲の近代社会がその豊かな自然を犠牲にするかたちで成立したことに目を向け、その歴史を生態系の破壊のプロセスとして捉えようと試みることである。これは「近代社会」に対する文明批評という性格を有している。もう一つは、そうしたプロセスを経て成立した近代の満洲社会を「県城経済」というモデルから捉え、そこから、その経済・社会構造の実像に迫っていくことである。鉄道・馬車輸送システム、タルバガン猟、大豆の国際商品化といった問題などへの考察が「媒介項」としての役割を果たすかたちで、この二つの問題関心は互いに絡み合い、本書は一つの研究として有機的にまとめあげられている。そうした研究の枠組みの設定が、まず、本書を魅力あるものとしている。

ここで言う「県城経済」という概念は、スキナーの農村社会論、その定期市モデルに対置されるかたちで提示されているが、その性格は「作業仮説」的なものであり、そこには開放的な議論の場が設定されている。したがって、研究対象や学風などを異にする編著者たちも、それぞれ、さまざまな視点からこのモデルに接近することができ、その結果、本書の各章は、県城を中心とした経済流通網の存在を多面的な側面から明らかにしている。たとえば、馬車輸送網、廟会、県流通券などの考察はそれ自体が大変興味深い内容であるが、そこから、読者は具体的なイメージをもって「県城経済」の議論のなかに入っていくことができよう。モデルが明示されることにより、本書全体を貫く論旨は明瞭なものとなっており、それと同時に、議論の内容は多彩で幅

広いものとなっている。

本書が、「県城経済」の議論のなかに、政治の領域も視野に収めようとしている点は重要である。つまり、本書は、「県城経済」の展開は各県を一つの政治的な単位としてまとめあげ、張作霖・張学良政権、および「満洲国」はそうした各県を掌握することにより、比較的容易にその政権基盤を確立していった、と見ることができるのではないかと論じている。その政治史への関心は、第Ⅲ部において、金融界や商工業界の動向から、近代満洲における新たな権力構造の創出を見いだそうとしている点からもうかがえる。張作霖・張学良政権、「満洲国」史の研究にとって、満洲社会そのものに内在していた「経済」と「政治」との間の連鎖関係に迫るという作業は重要な意味をもつ。編著者も認めているように、本書のこの点の考察はなお推論としての性格が強いが、そこに、中国史研究の伝統的なテーマである「封建」と「郡県」、つまり、地方社会と権力中央との関わり方の問題が強く意識されていることは、この研究のもつ射程の広がりを示しているといえよう。

さらに、本書の特長として、地域間の比較という視点を設けていることがあげられよう。つまり、スキナーの農村市場モデルが成立する山東社会と、それがあてはまらない満洲社会の場合を比較し、そこから、近代満洲社会の個性を際立たせようとしている。本書の「県城経済」という概念は、こうした比較の視点から生み出されたものともいえる。そうした手法がとられたことにより、「満洲」はなぜ「満洲」なのかという基本的な問いが効果的に浮き彫りにされてきている。ただし、「満洲」をどのような地域概念で捉えるかという問題は決して簡単ではない。この点と関連して、近年、満洲と山東、あるいは、ロシア極東との間の経済・社会関係等について注目すべき論考がいくつか発表されているが、その点については後述したい。

## III 期待される検討課題

本書の研究成果、特長を確認したうえで、その議論のなかに内包されているさらなる検討課題といったものについて述べてみたい。まず、第一に、本書の考察対象が「県城」の経済的・政治的機能にある

ことから、満洲の各県が辿った歴史そのものに迫るといふ作業は今後さらに必要かもしれない。とりわけ、清末の東三省（満洲）における内政改革の意味を探り、そこから、「県城経済」の成立・展開過程を捉えていくことは重要であろう。1907（光緒33）年、清朝はそれまでの東三省における八旗軍政支配を廃し、その行政機構を民政のもとに移行した。満洲近代史にとって、このことのもつ意味は大きい。すでに1870年代中葉から、この地域では県の設置が進んでいたが、日露戦争後、東三省は中国関内各省と同様に総督撫制のもとに置かれ、その後、総督を務めた徐世昌、錫良、趙爾巽のもとで、州県制を基盤とした新たな行政機構の整備、内政再建のための諸改革が進められた。この地域の在地有力者たちはこうした改革の動きに呼応するかたちで、その政治的発言力を強化し、県を単位に結集していったといえる。そうした有力者の家は、多くの場合、土地所有や商業といった経済活動と深く関わっていた。また、その一部は「皇産」等の解体過程のなかで台頭してきた人々であり、そうした土地財産の利権と無縁ではなかった。清末の新政期こそ、県の有力者が本格的に跳梁し始めた時期であったといえる。したがって、新たな開発地の社会がそこに生み出されていったというより、むしろ、この時期、八旗制のもとにおかれていた旧社会が大きく変容していったという捉え方ができるかもしれない。清朝の時代にまで遡って、県の設立・整備の歴史、そこに権力基盤を置いた地元有力者などの動きを具体的に探っていくことは、「県城経済」の中身をより鮮明にしていくうえで、興味ある課題となりえよう。

第二に、本書は「満洲」を一つのまとまった地域としてマクロ的に捉えているが、満洲の内側に存在した地域間の経済・社会構造の差違、その相互の連関といった問題についても考えてみる必要がある。「柳条辺牆」の存在にも示されるように、清朝の時代においても、遼島半島を中心とする地域とその外側では社会の様相は異なっていた。近代以降においても、北満洲の開発の歴史と南満洲のそれとは、相互に密接に関連するものの、それぞれ分けて考える必要がある。最近の研究、たとえば、荒武達朗『近代満洲の開発と移民』（汲古書院、2008年）などは、ロ

シアの極東進出と密接に結びつけるかたちで北満洲の歴史を論じ、南満洲とは異なった北満洲開発のプロセスとその社会形成、および北満洲と中国本土との間の直接的な経済関係を捉えようとしている。満洲内部の地域間の関係については、たとえば、政治史の分野でも、清末から張作霖政権の時代にいたるまで、奉天省と吉林省の政治権力との間には強い対抗関係が存在していたことなどに関心が寄せられている。満洲を形作った各地域の経済、政治、社会の状況をそれぞれ明らかにし、そのうえで、どのように満洲全体の歴史像を構築していくかという問題が、そこにはある。本書の研究をさらに進展させていくなかで、この点は是非とも取り組んで欲しい課題である。

第三に、本書の「県城経済」の議論の延長線上に、農村と都市・外港との間の経済関係を考察していくことも必要であろう。本書は満洲全体の流通構造をマクロ的に捉えようと試みているが、その主な研究関心は農村経済構造の解明に向けられている。そこで、たとえば、第三部で取りあげている奉天、營口などに加え、大連、ウラジオストクなどの外港が果たした役割にも目を向け、農村と都市・外港との間のヒト、モノ、カネ、情報の動き、さらに、満洲とその域外との間に結ばれた経済関係についても踏み込んだ議論を展開することが期待できよう。つまり、満洲内部の経済構造をその外部との関係からも検討していく作業である。そこには、本書であればこそ見いだせるような課題、たとえば、鉄道・馬車輸送網の成長が大連とウラジオストクとの間の競合関係にどのような影響を与えたのか、といった問題も含まれるかもしれない。また、それは、満洲における「円」や「ルーブル」の流通問題とも深く関わってくるであろう。そうした問題に取り組むことは、満洲近代史の分野だけではなく、東北アジア史研究全体にとっても重要な意味をもってくる。

#### IV まとめ

近年、これまでの満鉄史料などに加え、漢語、ロシア語などの一次史料の利用が大幅に可能となったこともあり、中国史、ロシア史、日本史などの分野などで、満洲近代史についての研究成果が続々と発

表されている。そうしたなかで、たとえば、左近幸村『近代東北アジアの誕生』（北海道大学出版会、2008年）の刊行に示されるように、中国史、日本史、ロシア史、モンゴル史、朝鮮史などの「各国史研究」の枠組みに必ずしもとらわれずに、地域研究としての「東北アジア史」という視座を設定し、そこから、満洲の近代を捉えていこうとする研究の動きもみられる。さまざまな視点、分野からの満洲近代史へのアプローチが試みられているなかで、本書は「モデル」を使った分析手法に依拠し、また、自然破壊という生態系の問題を強く意識しながら、この地域の経済・社会構造の実像に迫ろうとした。その試みは大変意欲的なものであり、満洲近代史研究の今後の進展にとって、本書刊行の意義は大きい。学風もそれぞれに異なる個性豊かな執筆陣による各章を、一冊の本としてまとめあげた編者の組織力も高く評価できよう。

(名古屋大学出版会、2009年11月刊、A5判、573頁、7400円)